又云、〈「悪鬼其の身に入る」〉等云云。文の心は第五の五百歳の時、悪鬼の身に入る大僧等国中に充満せん。其時に智人一人出現せん。彼の悪鬼の入る大僧等、時の王臣万民等を語て、悪口罵詈、杖木瓦礫、流罪死罪に行はん時、釈迦・多宝・十方の諸仏、地涌の大菩薩らに仰せつけば、大菩薩は梵・帝・日月・四天等に申くだされ、其時天変地夭盛なるべし。国主等其のいさめを用ずば隣国にをほせつけて、彼々の国々の悪王・悪比丘等をせめらるゝならば、前代未聞の大闘諍一閻浮提に起るべし。其時日月所照の四天下の一切衆生、或は国をしみ、或は身をしむゆへに、一切の仏・菩薩にいのりをかくともしるしなくば、彼のにくみつる一の小僧を信て、無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆頭を地につけ掌を合て、一同に南無妙法蓮花経ととなうべし。例せば神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向て大音声をはなちて、南無釈迦牟尼仏〳〵、南無妙法蓮花経〳〵と一同にさけびしがごとし。

問云、経文は分明に候。天台・妙楽・伝教等の未来記の言はありや。答云、汝が不審逆なり。釈を引かん時こそ経・論はいかにとは不審せられたれ。経文に分明ならば釈を尋ぬべからず。さて釈文、経に相違せば経をすてゝ釈につくべきか、如何。彼云、道理至極せり。しかれども凡夫の習、経は遠し釈は近し。近き釈分明ならばいますこし信心をますべし。今云、汝が不審ねんごろなれば少々釈をいだすべし。天台大師云、〈「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」〉。妙楽大師云、〈「末法の初め冥利無きにあらず」〉。伝教大師云、〈「正像稍過ぎ已りて末法太だ近きに有り。法花一乗の機、今正しく是れ其の時なり。何を

以て知ることを得る。安楽行品に云く、末世法滅の時なり」〉。又云、〈「代を語れば則ち像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生闘諍の時なり。経に云く、猶多怨嫉況滅度後と、此の言良に以有るなり」〉云云。夫釈尊の出世は住劫第九の減、人寿百歳の時也。百歳と十歳の中間、在世五十年、滅後二千年と一万年となり。其中間に法花経の流布の時二度あるべし。所謂在世八年、滅後には末法の始五百年なり。而に天台・妙楽・伝教等は、すゝては在世法花の御時にもれさせ給ぬ。退ては滅後末法の時にも生させ給はず。中間なる事をなげかせ給て末法の始をこひさせ給御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生させ給しを見て悲云、現生には九十にあまれり、太子の成道を見べからず。後生には無色界に生て五十年の説法の坐にもつらなるべからず、正像末にも生るべからず、となげきしがごとし。道心あらん人々は此を見きゝて悦ばせ給。正像二千年の大王よりも後世をもはん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信ぜざらんや。彼の天台座主よりも南無妙法蓮花経と唱る癩人とはなるべし。梁武帝願云、寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも欝頭羅弗とはならじ、と云云。

問云、竜樹・天親等の論師の中に此義ありや。答云、竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給とはいえども言には此義を宣給はず。求云、いかなる故にか宣給ざるや。答云、多の故あり。一には彼時には機なし。二には時なし。三には迹化なれば付属せられ給はず。求云、願くは此事よくくきかんとをもう。答云、夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり。迦葉尊者仏の付属をうけて二十年、次に阿難尊